

婚約者に捨てられた
くなくて先に婚約の
白紙を申し込んだ公
爵令嬢が、婚約者に
お仕置きされる話—
体験版

がら堂 / どん丸

A t t e n t i o n

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

ドスケベが書きたいだけで、ストーリー性は無い、いつもの話です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

この国の四大公爵に数えられる名門、ブーランジエ家の長女であるイリナは白金色の腰まで伸びるストレートの髪と薄氷色の吊り目がちな瞳を持った美少女だが、それらはイリナの美しさ以上に冷たさを強調させている。その証拠というべきか、イリナには友人が一人もいない。おかげで物心ついた時から兄のジャンにぴったりくっついて離れず、どうしたものかと家族は頭を悩ませていた。

そんな中で十歳になる前のイリナが出会ったのが、この国の第三王子であるダニエルだ。

ダニエルは濃い金髪に同じ色のまつ毛に覆われた若芽色の瞳をもつ天使のような美少年で、いつもにこにこしながら二歳年下のイリナを実の妹のように可愛がった。イリナもまたダニエルに懐き、家族にしか見せないような笑顔をダニエルには見せた。そして、出会

ってから数ヶ月後に二人は婚約者となる。

穏やかなダニエルと内弁慶なイリナはとても相性が良かったようで、二人は政略結婚のために引き合わされたとは思えないくらい仲が良かった。二人とも王位継承権には興味がなかったのが良かったのかもしれない。

しかし、ダニエルが精悍な美青年に成長し、貴族の通う学院に入学してからは、二人が合う頻度は減り、会う時間に比例して二人の仲も少し離れてしまった。追うようにイリナも同じ学院に入学するが、学年が違う為、二人が顔を合わせることはほぼない。

そしてある時、その学院に、とある平民の少女が転入してきた。アメリという名の、愛くるしい少女である。平民ではあるが持ち前の人懐っこさでどんどん学院の生徒や教師らに好かれていった。

それを面白くない目で見ていたのがイリナとイリナの取り巻きの女生徒たちだ。アメリカは貴族女性からしたらありえないくらい男性にベタベタしていた。婚約者でも何でもない相手にすぐ触って、口を開けて笑う。「やめなさい」とイリナを含め何人かの女生徒がアメリカに注意したが、アメリカがそれをやめることはなかった。アメリカからすれば、それは平民にとってなんでもない普通のことだ。男性に触れると言っても肩を叩くくらい。やめなさいと言われても今まで普通にやってきたことなので、よっぽど注意しないとやめるのは難しかったのだ。

そんな中で、本人たちの意思とは別に、学院は「イリナ派」か「アメリカ派」かで大きく割れた。イリナもただアメリカに行動を改めてもらいたかったただけなのだが、気がついた頃にはもう遅かった。

イリナはアメリカ派の学生に、アメリカはイリナ派の学生にチクチク嫌味を言われるような日々になってしまった。

あまり他人の言うことを気にするようなイリナではなかったが、流石に毎日毎日チクチクチクチク言われていたらメンタル的に参ってくる。そんな時に、イリナは見てしまったのだ。

ダニエルが、アメリカと触れ合って笑い合っているのを。

触れ合っていると言ってもやはりアメリカがダニエルの肩を少し触ったくらいのものだし、ダニエルが浮かべている笑顔はイリナに対してのものとは違う大衆向け用のものだ。

しかしイリナは、それを見て、サアツと顔を青ざめさせた。周りに勧められて最近読んだ恋愛小説にそっくりだったのだ。

平民ながら持ち前の人懐っこさで人に好かれていくヒロイン。い

つも笑顔を浮かべてはいるが心は閉じている王子。キツイ性格で周りに人を寄せ付けない王子の婚約者。そしてこの物語は最後に、王子とヒロインが結婚して終わる。

自分とダニエルとアメリカはそれだと繋げてしまったイリナは、まず、ダニエルから距離を置いた。客観的に自分たちの関係を見たかったのだ。学院では学年が離れていることもあり、距離を置くのは難しいことではなかった。

距離を置いて見てみれば、ダニエルとアメリカがよく一緒にいることがわかってしまった。この二人も学年が離れているにもかかわらず。委員会が同じなのだ。

そうしてイリナが二人を影から見続けて数ヶ月後、決定的瞬間が訪れてしまった。

「ダニエル様は、イリナ様をどう思っているんですか？」

「イリナ？ 可愛い妹が近いかな」

「では、わたしにもチャンスがあるってことですね」

「え？ ……君、まさか、僕のことが好きなの？」

それは放課後、イリナが忘れ物を教室に取りに行こうと一人で歩いている時だった。ダニエルとアメリカが何か荷物を持って二人で歩いているのを発見したイリナが二人をこっそり尾けた結果がこれだ。イリナはもう、耐えきれなかった。

「ダニエル様」

「イリナ？」

急に現れたイリナに、ダニエルとアメリカは目を見開いて驚いた。ダニエルは純粹に驚いているようだが、アメリカはバツが悪そうだ。

「こんな所を一人で歩いたらだめじゃないか。侍女はどうしたの？」
「……………ダニエル様」

自分を心配するダニエルの声音に、イリナは溢れそうになる涙を止めるのに必死だった。

「イリナ……………？ どうしたの、具合でも……………」

「婚約は白紙にして下さい」

イリナがダニエルの言葉を遮ったのは初めてだった。突然の言葉にダニエルは目を見開くが、イリナは構わず続ける。

「家の方へは、私から言っておきます。……………今まで、ありがとうございます」
「ございました」

それだけ言って頭を下げそのまま踵を返してイリナは走り去ろうとするが、すぐに腕を掴まれて前に進めなくなる。

「イリナ、何を言ってるの？」

「離してくださいっ……」

「イリナ、話をさせて」

「いやですっ！」

はあ、と大きな溜め息をつく音が聞こえて、思わずイリナはビクリと震えた。恐ろしくて振り向きたくない。しかし、逃げられないように強く握られた手は、絶対に逃さないという意味を感じるものだった。

「イリナが話したくないなら、いいよ」

「……じゃあ、離し……」

「身体に聞く」

「えっ？ きゃあっ！」

ふわりと身体が浮いて、イリナは思わず目の前の首に抱きつく。ダニエルに横抱きにされたのだ。ダニエルと距離を置こうと思っていたイリナも、つい幼いころからのダニエルの相性が飛び出してしまおう。

「なっ、だ、ダンっ！ 何してるのっ?! 下ろしてっ！」

「ごめんね、ニール嬢。僕のお姫様にご機嫌斜めだから、ちよつとご機嫌伺いしてくるよ。悪いけど後のことは任せてもいい？」

「は、はあ……」

微妙な顔をするアメリを置いて、ダニエルは人一人抱いているとは思えない軽やかな動きでその場を後にした。

「きやつ！ な、何するのよっ！」

部屋に入った途端、イリナはベッドの上に放られる。ダニエルはそのまま覆い被さってきた。

両手を取られ、指を絡めるように手を繋がれ、上から覗き込まれる。その目は、いつもの優しいものではなく、明らかに捕食者の目をしていた。

「話してくれる気になった？」

耳元で囁かれて、ゾクツとしたものが背筋を走る。咄嗟に逃げようと身を振ったがびくともしなかつた。

「こら、逃げるな」

「ひゃううっ♡」

耳に熱い吐息を吹きかけられ、声が出てしまう。それを面白がったのか、何度も吹き掛けられて、その都度甘い悲鳴をあげてしまう。自分の口から出てくる聞いたことのない声が恥ずかしくてイリナは口を塞ぎたがるが、ダニエルに両手を押さえつけられているため動けない。

「ね、教えてくれないの？」

「は、話すから、止め……んむっ」

喋ろうとした口を塞ぐようにして口付けられる。舌を差し込まれ、歯列をなぞったり上顎を擦られたりと好き勝手に蹂躪されて、イリナは必死で酸素を吸おうとするが、無理だった。

昔からダニエルは、周りの大人に隠れてイリナにキスをする事があった。昔は触れるだけのキスだったが、数年前から深いキスに

変わっていき。やはり今回みたいに、イリナはされるがままで何もできなかつた。

しばらくされるがままになっているとようやく解放されたイリナは、銀の糸を引いて離れていく唇を見て物足りなさを感じてしまい、顔を赤くさせる。

そんな様子に気付いたダニエルはクスリと笑いながら再び顔を近づけてくる。

「もっとする？」

「しないっ！」

真っ赤になって否定するが、説得力はない。

「それで？ どうして婚約を白紙にしたいだなんて言い出したんだ？」

「そ、それは……」

イリナが言葉を濁すと、ダニエルは再びキスをしてきた。先程のような激しいものではないが、ゆっくりと味わうかのようなものだった。

「ん……んん……はあ……。だ、だって、私が邪魔なんでしょう？
私のことを、妹みたいだなんて言って……あの人と、一緒になりたくないじゃないの」

イリナがダニエルの肩を押し退けると、素直に離れた。イリナはダニエルの目を見られずに、視線を下げて喋る。

「それって、ニール嬢のこと？」

こくりとうなずくと、ダニエルは大きく溜め息をついた。

「彼女とは委員会が同じだけだよ」

「嘘ばっかり！ あんなに触らせて、笑顔を見せて……私とはもうずっと一緒にいてくれないじゃないっ！」

「つまり、嫉妬してるってこと？」

図星だ。

口を閉じたイリナは、情けなさでどうにかしそうだった。第三王子の婚約者が、嫉妬で、婚約から逃げようとするなど。やっぱり、自分はダニエルの婚約者には向いていないのだ、と萎れるイリナは、ダニエルが向けている目の色に気づいてはいない。

「……そういえば、ここ数ヶ月は忙しくてあまり会えてなかったな。寂しい思いをさせたみたいだね」

頭を撫でられ、髪をすいていた手が頬に触れる。優しく微笑まれ、胸がぎゅっと締め付けられた。

「僕もイリナと会いたかったよ」

甘く蕩けるような声で言われ、一気に顔が熱くなる。心臓はバクバクと激しく脈打ち始めた。

「でも、ちよつと離れただけで婚約を破棄しようとするのはいただけないな」

「……ちよつとじゃないもん。いっぱい悩んだもん……」

「それでも、最終的にそこに落ち着くのは許せない。イリナは僕から離れて、他の男と一緒にになりたいわけ？」

「そ、そんなこと……」

「イリナは僕のものだ」

「あ……」

ぎらぎらと燃えているように見えるダニエルの若芽色の瞳に、イ

リナは飲み込まれてしまったような感覚を覚えた。

「僕から離れようとする悪い子には、お仕置きが必要だよね？」

「え、きやつ!!」

ダニエルの手がイリナのドレスに伸び、イリナは慌てて抵抗しようとしたが、すぐに押さえ付けられてドレスを腰まで下ろされてしまった。

「な、な、なん、あんっ♡」

ダニエルの大きな手が、イリナの胸を包む。ふにゆふにゆ♡と柔らかく揉まれて、イリナは甘い声を漏らした。

「イリナ、かわいい」

「な、だ、だめよ、こんなものっ！ 結婚前に、絶対だめっ……!!」

「だからするんじゃないか」

「はっ!!」

「婚約を白紙にするだなんて、馬鹿なこと言えないようにね。やってしまえば、もうイリナは僕と結婚するしなくなるるだろ?」

ばかりとイリナが口を開けると、ダニエルはすぐにその口を塞いで舌を入れてきた。

「んんーっ!! んむうく!」

抗議の声をあげるものの、全て飲み込まれてしまう。その間も大きな手はやわやわと胸を揉んできた。

「イリナ、十年前から、君は僕のものになるって決まってるんだよ。絶対逃さないから」

「んあっ♡ ダン、や、あうっ…♡」

乳首を摘まれたり転がされたりされて、あっという間に硬く尖っ

てしまう。イリナは恥ずかしさにダニエルの手を止めようとするが、再び口を塞がれ口内を犯され、抵抗できなくなってしまった。

「ん……ちゅ……ぷはあ……。そんな可愛い反応をしてるのに、嫌なわけないよね？ 感度もいいし……昔から、感じやすかったけど」
「ち、違っ！ ひやうんっ♡」

今度は首筋を強く吸われ、赤い跡が残った。

「こっちにも付けておかないとね」

「ダ、ダメ……！ んんんんっ……！」

反対側の首筋を舐められ、甘噛みされる。チクツとした痛みと共に小さな所有印を残されたことに気付く。

その間にもダニエルの手は止まらず、下着の中に入り込んできたかと思うと、敏感な芽を探り当てられた。

「あぁっ！ ダン、だめ、だめっ！」

「どうして？ ほら、ここは喜んでるみたいだけど？」

「ふぁあっ♡ やだやだ、お願い、止めてえ……んぁあっ♡♡」

指先でピンっと弾かれた瞬間、全身を甘い痺れが駆け巡った。

「やぁ、ダン、こわい、なにこれ、わかんない、こわいっ……！」

「ふふっ、イリナ、かわいいよ。いったのかな？」

ぐちゃりと水音が聞こえた気がしたが、頭が真っ白になってよく分からなかった。ただひたすら怖くて、助けを求めるように必死で手を伸ばした。

すると、それに気付いたのか抱きしめられると同時に唇を奪われる。

「大丈夫だよ、イリナ。ちゃんと気持ち良くしてあげるからね」

「やあ、ダン、やだあ、んんっ♡」

「ほら、大丈夫だから、力抜いて？」

ぬぶ、と何かが入ってくる感覚に、イリナはつい身体に力を込めてしまう。だが、耳元で囁かれる言葉に従い少しずつ力を抜くと、「いい子だね」と頭を撫でられてまたキスされた。

そうしているうちに段々と力が抜けてきて、代わりにゾワリと鳥肌が立つような快感を感じ始める。

「あ、あ、あ……」

やがて中を探るように動かされていたものが動きを止めたかと思うと、とんとんと、と奥をノックし始める。

「あああ……!!」

「ここが一番感じる場所だって聞いたんだけど……どう？」

トン……♡ トン……♡

優しく何度もそこを突かれて、その度にビクビクと震える。

次第に頭の芯まで溶けそうなほどの熱に襲われて、イリナは何も考えられなくなってきた。

「イリナ、わかる？ 僕の指が入ってるところ」

ダニエルの言葉を理解することもできず、イリナはほとんど無意識のうちに自分の腹をさすっていた。

「ここに、ここまで入るんだ。君の子宮まで届くくらい。君が誰のものなのか、しっかり教えなきゃね」

ずる、と長い指が引き抜かれ、イリナの腰がぶるぶると震えた。

衣擦れの音の後、すぐに熱い塊を押し付けられ、それが何であるか悟ってハッとすする。

「ダ、ダメよ、それだけはダメ、ダン、おねがいっ！」

「僕はね、イリナ」

ダニエルはにこりと笑うが、目の奥が笑っていないのが丸わかりで、イリナの背中をぞくぞくと悪寒が走る。

「ずっと我慢してたんだよ？」

「ひっ……！」

続きは製品版で

婚約者に捨てられたくなくて先に婚約
の白紙を申し込んだ公爵令嬢が、婚約
者にお仕置きされる話_体験版

2021年12月24日発行

♡ どん丸／がら堂

♡ Twitter : @donmar18